

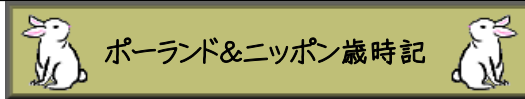
の中でも物価が安く、多くの外国人が気軽にヨーロッパを楽しめ、かつ独自の食文化や景観を楽しめる。国際化と言うと聞こえは良いが、ポーランドや日本のようなある種閉鎖的な国柄は、外の文化圏から来る人間から見れば非常に独創的個性的であり何より面白い。国際化は大いに結構だが、まず自分の文化を守り子孫に伝えるのが一番大切であろう。

かくして私の二週間のポーランド紀行は幕を閉

じた。空港でエヴェリナは別れを惜しみ涙したが、来る12月、今度は彼女のほうが日本に来る予定だ。一体彼女が本物の日本を見て何を感じるか、今から楽しみである。彼女の日本旅行はまた機会があれば皆様にお伝えしたい。

(おおつか・こうすけ、2017.9.30)

写真(上)エヴェリナと筆者(中)ポーランド料理・ピエロギ(下)クラクフ・聖マリア教会



キノコ狩り

今秋はキノコが豊作でした。キノコ狩り(grzybobranie)という伝統は『パン・タデウシュ』にも描かれています。私も子供のころに参加したことがあります。後でキノコの「帽子」と「足」に糸を通して部屋に干すと、家中が森の香りでいっぱいになったものです。

zapach dzieciństwa	ビゴス鍋
podgrzybki prosto z lasu	思い出が沸く
w garnku bigosu	キノコ狩り
Monika Tsuda, Poznań	ポズナン市、津田モニカ
kropla po kropli	雨だれの
deszcz rytmu wystukuje	リズムに踊る
do liści tańca	木の葉かな
Piotr Wrzeciono, Warszawa	ワルシャワ市、ピョートル・ヴジェチョノ

老松や冬霨ふゆもやけつて龍昇る
若水やノミ研ぐ鬼師鬼を彫る
往きし人窓の向かふの雪明り

岩見沢市、霜田千代麿



第19代札幌コンサートホール専属オルガニスト
マルタン・グレゴリウスさんに聞く

徳田貴子*

マルタン・グレゴリウスさんはポーランド・グディニア出身、2017年9月1日キタラの専属オルガニストとして札幌にやってきた。キタラでのデビューコンサートでは即興演奏を含む素晴らしい演奏を披露された。はるばるポーランドから札幌にやってきたマルタンさんの素顔に迫るべく、去る10月23日、初雪が降るなか札幌パークホテルでお話をうかがった。

行間を読む日本人のコミュニケーションは素敵

マルタンさんは日本での生活は初めてである。日本といえば歴史ある建物が多いイメージだったが、札幌は予想外に現代的で綺麗な街でびっくりしたという。特に札幌駅と大通り駅をつなぐ地下歩行空間には「寒いから皆さんこちらを歩くのですね」と感心したそうだ。食べ物は「ラーメン、寿司、てんぷら、しゃぶしゃぶなど美味しいものばかりで大好きです。でも、納豆は苦手ですね」とか。

日本人の印象は、大変礼儀正しく良い方ばかりで、日本人の精神性が好きだと何度もおっしゃって

いた。特に、日本人は仕事の上でも「できない」ことを「できない」とはっきり言わないことに気づいて、ヨーロッパの人々はもっと正直に思ったことをはっきり言うけれど、「日本人の行間を読むようなコミュニケーションの仕方は素敵だ」と感じたという。筆者も米国に10年間留学して当初は「No」とははっきり言えず、欧米の方とスムーズにコミュニケーションをとれなかったことを思い出して、意思疎通の方法の違いを「素敵なこと」と受け入れてくださるマルタンさんにとっても親しみを感じた。

日本の観客には演奏者に対する敬意を感じる

コミュニケーションの取り方は観客の反応にも現れる。筆者は留学中、アメリカ人の歌手の友人から、ドイツでシュトラウスの歌曲を歌ったら聴衆も一緒に歌いだしてびっくりしたと聞いたことがある。日本のお客さんの反応にも違いはあるのだろうか。

「デビューコンサートでは、最後に《赤とんぼ》や《ソーラン節》など日本の有名なメロディーをふんだ

んに取り入れて即興しました。絶対皆さん知っている曲ですよ。もしこれがドイツならお客さんが隣同士で『この曲知ってる!』とかヒソヒソ話を始めます。シュトラウスを歌い始めたというのも、きっとそういうお国柄のせいでしょう。でも日本人はそういうときでも皆さんとても静かですね。きっとシャイなんですよ。拍手のときも、誰もフライングせずみんな一斉に拍手してくれます。でもそういうところに温かみや、演奏者に対する尊敬の念を感じます」

筆者の経験でも、聴衆が一生懸命音楽を聴いてくださっていると、ステージ上の演奏者にもそれは感じとれる。そういう聞き手の集中力が半端でないことは、特に日本に帰国後、強く感じている。マルタンさんもそれを感じているのかもしれない。

即興ではより自由になれる

デビューリサイタルでは素晴らしい即興を披露されたマルタンさん。彼にとって「即興演奏は長年やってきたので、とても自然なことなのです」。「初めて即興をしたのは5歳のとき」とは驚きだ。「初めは既存のメロディーにカウンターメロディー(内声)を探して付け足すといったシンプルなものでした」というが、和声や構成などをよく知っていないとできないことだ。マルタンさんは「誰かが作曲したものを演奏するときは、作曲家のメッセージを解釈して聴衆に届ける責任を強く感じますが、即興ではより自由になれます」「即興するときは和声や構成などたくさんのことを考えますが、より自由に表現できます。音を間違えても、そこから発展させられますしね」という。彼にはそれだけの知識と経験があって、作曲家の世界を伝えるメッセンジャーとしてだけでなく、自分自身を表現するために、自由自在にオルガンを演奏しているのだろう。

オルガンとの運命的出会いと三カ国での音楽教育

マルタンさんとオルガンの出会いは運命的だった。「小さいときテレビでグダンスク市のオリヴァ大聖堂(Gdańsk Oliwa Archcathedral)のとてつもなく巨大なオルガンの演奏を見たのです。録画ビデオをその後2千回も見たとします。しばらくして両親に連れられてその教会を訪れ、オルガニストに会うことができました。その方がのちの私の先生です」

それがきっかけでピアノとオルガン両方を専攻してグダンスクの音楽学校を卒業し、さらにドイツ(デトモルト)とフランスの国立高等音楽院(パリ、リヨン)で研鑽を積んだ。両国での教育の違いは、「フランスでは先生はとても素晴らしいけれど、生徒を子ども扱いするというか、生徒は先生の言うことを聞かなければいけないという感じでした。一方ドイツでは、一人ひとりの個性をより大事にして、一人の音楽家とし

て生徒を扱うという風でした」という。体系的な教育を授けられた一方、それを昇華させて一人前の音楽家として立つ教育も受けたのだろう。博士課程を終えるころパリ高等音楽院の教授からキタラのオルガニストへの応募を勧められたのだそうだ。

歴史などあらゆる側面から音楽を研究したい

日本にいる間、たくさんの都市でコンサートが企画されているので(12月すみだトリフォニーホール、7月サントリーホールほか)、まずそれを成功させたいという。先代のオルガニストから「日本には素晴らしいオルガンがあると聞いていますので、その楽器に出会えるのも本当に待ちきれないです!」と嬉しそうに話してくださいました。

博士論文が終って今はより自由な時間があるので、レパートリーも増やしていきたい、特にフランス印象派の曲をもっと勉強したいという。

「単に曲を学ぶだけでなく、歴史や作曲家の人生など、あらゆる側面から曲を研究していきたい。3月には録音する予定なので、それも頑張りたい。今回はCDのほか、初めての試みとして iTunes でも配信されるので楽しみです」とのこと。

オルガンにはいつも新たな発見がある

マルタンさんにとってオルガンは運命の楽器といえるだろう。長年ピアノも勉強されてきたが、オルガンという楽器の良さについて、こう語ってくれた。

「オルガンはとても大きく豊かな音がしますし、その特性を生かしてオーケストラのような音を出すことも可能です。また、ハーモニーによって音がとても変わります。ストップを用いて音色を変えることもできて、いつも新たな発見があります」

即興演奏を自在に操り、オルガンという楽器の可能性を探求し続けたいというマルタンさんの音楽への情熱は途切れることがない。

札幌での次の演奏会は、12月9日(土)札幌コンサートホール開館20周年記念オルガンガラコンサートで初代・2代目のキタラ専属オルガニストとの共演、そして雪まつりの2018年2月4日(日)札幌コンサートホールで**オルガンウィンターコンサート**。

小さいころからオルガンに魅せられ、人一倍努力されてきたマルタンさん。日本特有の文化にも理解を示し、ポジティブに受け入れてくださるところに人柄の深さも感じた。歴史的背景や作曲家の人生もより深く研究し、あらゆる側面から曲をとらえたいというマルタンさんの奏でる音楽がここ札幌でどのように進化していくか、大いに注目したい。(とくだ・たかこ、2017.10.28、写真 松山敏)



創立30周年祝賀会(2017.10.21)に参加したマルタンさん